

心理療法とフロイドの初期の思想

堀 淑 昭

問題提起

現代の心理療法と、フロイドの考えた精神分析学とは、全体の姿からして相当異なったものである。精神分析学自体の中でも、いわゆる新フロイド派はもちろん、フロイドの流れを忠実に汲んでいるといわれる正統精神分析学も、フロイドの深層心理学と異なった自我心理学を発展させることに力を尽している。さらに、フロイドの精神分析学から多くを学びながらそれぞれ独自の理論と方法をつくりだした多くの派がある。たとえばサイコ・ドラマ、行動療法等である。現在ではあまりにも多くの異った理論と方法があり——100 を超す独自性の主張者があるといわれている——相互に喰いちがいながら混乱している状況である。

私は、日本の心理学者で心理療法を研究実践するものの多くと同じに、ロジャースのクライエント・センタードセラピーから出発した。そして精神分析の教育もある程度受けた。そしてこの両派から摂取したものも沢山あるけれども、どちらにも属しきれないでいる。こうなると、自分なりの一つの体系を作らざるを得ないはめになる。思想的には存在論特にハイデッガーのそれに親近性を感じるけれども、この哲学を十分に研究しているわけでもない。

要するに、ここらで私は、主に自分自身に浮かんでくる思い、自分で確かだと実感する考えを頼りに、心理療法の新しい体系を作る努力を自覚的組織的に始めようと思う。その第一歩がこの論稿である、

この論稿では、まず、将来の体系の中心になりそうないくつかの概念を提出する。次に心理療法の歴史を批判的に辿りなおして栄養摂取するとい

う仕事の第1として、フロイドの初期の思想を再構成してみよう。

私の理論体系の重要な一部となるだろう諸概念は、「主体性」「構想(力)」「体験過程」「リアリティ」であり、これらの諸概念を使いながら「この世で自分が生活していくこと」としての人の心を体系づけていくことになるだろうと予想される。

体験過程ということばは、U. Gendlin が主に使い、クライエント・センタード・セラピーの中にとり入れられた重要な概念である。私はそれに特に変更を加えようと思わないが、Gendlin の理論では、人がなぜ体験過程から離れるか、また、体験過程から離れたときの人間のあり方はどうであるかは不明であるし、また体験過程のもろもろのあり方特に体験自体のせばまりや浮き上がりが問題になっておらない。要するに、Gendlin 等は体験過程だけを後生大事にあがめているというのが現状であるに見えるので、それ以外の、主体性や構想とのダイナミックな関係で体験過程をとらえなおそうと考えているのである。

主体性という概念は、科学的心理学の中では禁句であったといってもよからう。それは、科学そのものが因果律の必然性の下に事象を、しかもあくまで客観的に、考察しようとすることからして当然であったろう。また、主観ということばと主体ということばの混同は日本でも外国でもある。近代科学の形成期とカントの哲学とが相俟って、主観を単に認識論のレベルにおとしめ、さらに客観性を欠く恣意的なもの、というイメージにしてしまったのであるらしい。最近では科学の限界と人間性の回復という観点からの実存哲学の主張やマルクス主義の主体性論争を経て、その地位が回復されてきた。そういうイメージを背景にして、私がとりあげたいのは、選択作用、強くいえば決断の働きであり、さらにのちに述べる構成と、その構成の一部である志向性との関連での主体性の問題である。また、特に浮き上がり（ハイデggerを訳す松尾氏のことばでいえば浮世のぼせ）と根源性を両極とする主体のあり方も重要な問題となるはずである。

構想の概念は、私の体系では論理的なかなめ石となるとおもわれる。心理

学では、ゲシュタルト、プロジェクション、社会的知覚などの研究で、知覚における知覚者の要因がとりあげられてきたが、私の構想の概念はそれと関係がある。簡単にいえば、それは、主体の意味づけの働きである。一例をとるならば、美しい花というのは、それをみる人を抜きにしては存在しない。外界に独立してあるのは多分、物理的に測定できるある硬度と寸法と反射度をもった物体でしかないだろうが、それをその獲得のために労をいとわない美しい花とするのは人間の側の感受性と決意によるものである。「人間は万物の尺度」の人間を浅薄に恣意的個人ととらないならば、意味と価値の領域ではこのことばはまことに正しいであろう。さらに後のべるように、人間をまず生活者実践者として捕えると、構想力が重大となる。

さらに、始めにのべたような心理療法諸学派の乱立と、そのどれもが治療効果をあげ、どの解釈もが正しいものとなる基本はこの構想性によるのであると思う。つまり、人は自分の過去を、現在を、未来を、さまざまな構想点からまとめ意味づけることができ、そのまとめ、意味づけによって立ち直り充実した生活を送るようになることができるのである。このことは大変平凡な事実であるが、多くの学派が唯一の正しさを主張したが、正しさそのものを権威的超越的なものにしたてあげるのに反して、私はむしろ「正しさ」がプラグマティックなものであり、しかも個人の具体的人生においての認知と価値の正しさが個人の構想力の活発な活動によって個別的に成立し賦活してゆくものと考えているのである。

この世で自分が生きていくこと、という準処枠 (frame of reference) は、もちろん、Heidegger の In-der-Welt-Sein をもじったものである。この世は一方で俗世、浮き世である。まずおおむね、人はこの世に順応適応し、つづがなく世間並みの、あるいはこの世に普通の望みを達成しようと努めながら生きていく。このように一方でこの世を優先させそれに合せて生きようとし、またそれがすっかり身についてしまうことがあるにしても、他方、人はこの世におさまり切れず、あるいはこの世を逃げ出して身をほろぼし、

またはこの世を超越して自己を主張し自己を生きぬき、あるいは一たんこの世を出て高みに達してから、この世と新たら和睦を結び調和に至る。このような姿は、心理学的な記述としては皆無であって、文学や宗教に描かれている人間の生きる姿である。

「リアリティ」という概念は、「この世で生活していくこと」と、「構想」の二つに密接に関係している。リアリティは人間的な真実性、現実味を指す。さきに、美しい花の例を使ったが、それはまだ、個人的な主体の構想としての例にとどまった。ここでリアリティというのは、人間的普遍性をもっている。正義、義務、道理、悪、は人間の本質、もっと適切な言葉を使えば人間存在に根ざしているであろう。人間がいらない、天体の、植物の、動物の世界に正義や道理があるとは思われない。人間の間にのみそれらは存在する。さらに、調和、美、無秩序等は、人間が世界の中に見出すことによって始めて存在するものとなる。それはちょうど、ロンドンの霧の美しさは、オスカー・ワイルドが描写して始めて存在するようになったといわれた消息と似ている。このように、人間が見て始めて世界がその一面を見せる、という意味で、正義や美は人間的であるけれども、それは世界の側にあるもの（存在）である。哲学でいう現代存在論はこのような意味での人間的存在の考究であると私は解する。したがって、それは世界の究明であるとともに人間の究明となる。

人間は、人間主体を抜きにして、世界の事実や法則そのものを知ろうとし、これを洗練したものが科学特に自然科学である。社会科学が自然科学にならって人間社会を研究することもできなくはないが、ここでは、人間的眞実がかならず内容として入ってくる。私としては、人間的眞実が、それを見とる人間を抜きにしては存在しないことを逆用して、そのような人間臭い眞実の眞実性を軸として人間生活を研究すべきだを考える。人間に現れる世界の基礎的構造を人間との相関のもとに考究する存在論は、この意味で多いに役立つ。

リアリティの程度というのは、人間を離れた客観的な眞実性や事実性で

なく、また単に主観的な感情性でもなく、人間的存在論的な深みの程度だといえる。人間の主体的な真実に近づくにつれて、その感動の質においてリアルとなるのである。ひとの生活行動や表現は、リアルとなることによって意味充実を持つ。

このように、リアリティは、一方で自己（特に人間存在の深みにおける自己）と、他方に世界との関連をもち、主体が世界を自己の存在において受けとめるその十全さにおいて高度となる。この主体が浮き上って世間のぼせになると、世界は段々とその意味充実を失い、同時に自己の生存意味もうすれてくる。自己が自己のぼせを起して世界への見開きと受けとりを失うと、世界は段々と異物と感じられ、じゃまもの、脅威となり、結局自己は基づくべき他者を失って狭く貧弱になってくる。

いままでのべてきた概念とその意味は、十分な吟味を経ない、私の生地 of の考えであるが、後に理論的具体的な問題を考えていく際、その進行を明瞭化し、自覚的に方法化するのに便利であろう。

さて、私自身の体系を作っていく方法の1つとして、既成の心理療法の体系を吟味してみることにする。精神分析は、歴史的にももっとも大きな意味をもつ心理療法の理論であり、私自身の教育の半分は精神分析によって受けたものである。そして出発点での状況を言えば、前にものべたように、精神分析に違和感と物足りなさを感じることが多く、精神分析を批判的に見直すことによって、別の解釈に到達できるだろうと思う。始めからそういう予想と意気込みで始めるのだから、不公平さと偏見が入りこむ可能性は十分多とい私自身にさえ思われる。

フロイドの精神分析理論

精神分析は、その成立の当初から、いかにも奇異な理論として世間や学界にうけとられた。汎性欲論だとか、機械主義だとか、了解連関と因果連関を混合した必然主義だとかいう批判を受けながらも、強大な理論となり、強力な実践力と広まりをもってきている。

最近のフロイド分派も、またフロイド直系と考えられる正統精神分析学

も、その奇異さを減じ、普通の思考で近づきやすいものになってきている。もっともフロイド自身にいわせれば、それは真理を犠牲にしての妥協でしかないかもしれないが。

私としては、先にのべた概念（主体性、構想、体験過程、リアリティ）や準処粹（この世に自分が生活すること）および、その時々私に生れてくる思いからするフロイド批判を試みよう。

まず、歴史的順序は逆になるけれども、見当の相当はつきりついている問題として、自由連想をとりあげてみよう。

自由連想法と主体性

自由連想とは、周知のように一切の批判を停止して、頭に浮ぶままを話していくということである。フロイドは、簡単にいえば、催眠下による外傷経験の想起の代りの方法として自由連想を使い出したのであるが、催眠の場合にははっきりと起らなかった抵抗の現象をこれによって発見することになった。この点をめぐっての批判的考察から始めよう。

まず第1は主体性の観点である。フロイドの人格理論のなかには主体性の問題がはっきりしていないが、彼のいう自我に主体性が含まれていると仮定しておいてもよいだろう。自由連想は、自我の現実適応の働き——これをフロイドは大部分防衛作用からなると考えるのだが——を排除停止することによるエスの流出と考えられている。この排除もしくは停止という考え方がすでに問題である。排除停止する働きを行うのは何か？主体である。したがって、排除停止によって防衛の働きが脱落するのではなくて、主体が全てを述べるという姿勢、志向性をとるのである。主体は、このとき外界に目を向け、自らそれに順応させる姿勢をやめ、自らの体験過程を指向し体験をそのままに敏感に感じとり、さらに体験過程の推移に身をゆだねるのである。そもそも体験は与えられるもの、である。ある思い、ある感情、ある記憶は、主体によってその方向をいくらか方向づけられるとはいえ、何がどう思われ、どういう感情になり、何が思い出されるかどうかは、主体にとって思いがけず与えられるもの、浮び出てくるもの、その

意味で全ては主体の自由にならぬもの、半他者である。自由連想とは、この、主体に与えられた私をそのまま受けとること、である。

ところでフロイドのいう自由連想では、ことばで話すということが重視される。それは一方では禁慾規則や *acting out* にもつながるが、どういうわけか初期のフロイドは抑圧され症状を惹き起すものを観念だとした。時には体験、感情、興奮などとも呼ぶが、これらの概念は未分化なまま使われ、大部分は観念ということばが使われている。後には観念とそれに附着もしくは備給（カテクシス）しているリビドーということになるのだが、もう1つ、この時代の連想（合）心理学の影響も考えてよいのだろうか、フロイドの自由連想で重要なのはことば、観念であって、彼は意識的のことを観念、ことばと同義にとっているらしいのである。もちろん知覚それ自体はことばでないが、知覚対象を、犬とか机とか名づけて意識することが知覚であるとフロイドは思っていたらしい。要するにここで私が言いたいことは、フロイドのいう意識的とは観念的ということであり、そこでは言葉になる前の知覚そのもの、言葉で言いつくせぬ体験や感情が見落されているということである。

さらに、自由連想が言葉でいうことと限定されるに応じて、主体は体験をながめ言葉にするものとして体験から離れてあることが定まってくる。事実フロイドのイメージでは患者は、治療者であるフロイド自身と同じに、観察者であることを、そしてまた報告者であることを要請されており、フロイドか、「患者の健康な自我と同盟を結ぶ」というときの患者の自我は、そのような自分を観察し報告しフロイドと同盟する主体なのである。ここで第2の問題が出てきたが、その前に第1の問題を整理すると次のようになる。

フロイドが自由連想と呼んだのは、自我の抑圧を排除停止して、エスから浮んでくる観念を自我が報告することであるが、それは、主体が体験過程を志向しそれに身をゆだねることと大分ちがうイメージの上になり立っている。フロイドは、事実あるのは体験であるのにそれを観念としてしま

い、まさに自由連想を行う主体についての考察をしないで通りすぎてしまったのである。ここで、主体は人間という生活者としての主体性を疎外され、自分の無意識という客体を冷静に観察し報告するという、たんなる科学者・研究者の立場に立つことを要請されるのである。

第2の問題と呼んだのは、このような観察者研究者の立場に、自己から疎外されることを要請されても、主体は決してそのような立場に立ちはいないし、そこに立つことを前提として作られた理論は虚妄である、ということである。もちろん、フロイドにしても、患者の主体が事実としてはそのような忠実な観察者の立場に立ちきれないことを知っていた。それを彼は、主体が無意識にまきこまれてしまうこと、抵抗を起すこととして概念化した。そしてフロイドはあくまで、忠実な観察者としてのいわゆる健康な自我をあてにし、それを客観的観察者として理論の上では考えているのである。というよりも、そのような理性的観察者であることを患者に要請しつづけ、最後には十分に理性的な観察者となって、自己についての十分の知識と理解をもつことが、フロイドの治療目標なのである。だからフロイドの理論では、主体はその人格理論から外されており、人間のそのような理性的観察者性が何となく始めから信用されてしまっている、という盲点が存在する。もちろん、実際の臨床ではこのような信用状は発行しえず、患者の主体のあり方自体が分析され問題にされざるを得ないのだが、そうなると実は最初から理論を検討しなおさなければならないわけになる。後に発展した自我心理学は、この問題に気づきかけていながら、大々的改訂版に全精神分析理論を作りなおすことをせず、今に至っている。

自由連想の際に起っていることを忠実に記述しその矛盾をあきらかにしてみよう。まずフロイドの言い方をしたときに患者が何を経験し何をするかを描いてみよう。フロイドの言い方というのは、「頭に浮ぶことをすべて言ってください。その際これはつまらないことだとか、関係ないとかの動機で除いたりせず、批判的な抗議の気持をもつようなことはしないで、ひとつひとつを言いなさい。」ということである。ここでもし患者が忠実

にそれに従おうとすると、そこでは、批判的な抗議をもつことをしないでという要請があり、関係ないとかつまらないとかの動機を語ることも除外されていると受けとらざるを得ない。ここで私は言葉の上でのケチをつけようとしているのでなく、フロイドがいかにも主体性を除外してムリにでも理性的観察者の立場に患者を立たせようとしているかを例証したいのである。そこで患者は、自分の心に何かが浮かぶのを待つであろう。（この待つのが主体の一つのあり方なのだが、そして後にライヒはこのことから性格分析の技法を作りあげるのだが）。そこで浮かんだことをすばやく報告するだろう。フロイドの使った例で言えば、汽車に乗って外の景色を眺め報告するように。である。この比喻でいえば、外の景色についての報告だけが要求されているのだから、景色についての驚嘆や感想は述べなくてもよいことになる。ところが、自分の心に浮かぶこと、というのは、観察している人自身の心なのだからやっかいなことになる。こんなことしてつまらないなと患者が思うとしたら、それは心に浮かんだこと(対象)であろうかもししくは観察者の感想であろうか。もし後者であるなら、それは報告しなくていいし、むしろ最初の指示にしたがって起きないように努めるべきことなのであるか。実は指示そのものに混乱があるのだから、すなわち2つに完全に分けられない観察者としての患者と観察すべき対象としての頭に浮かぶことを分けられるかのごとく分けてしまっている混乱があるのだから、患者が勝手に言うべきと指示されたことから除外してそれは当然であることになる。治療者がそれもあなたの心に浮かんだことだというならば治療者は患者をベテンにかけたことになって、理性的観察者としての患者を認めないことになってしまう。患者は明確な、事実即ち指示が与えられないために、混乱し納得しないままそれでも指示を守ろうとすると、忠実な患者なら忠実な患者ほど、むしろ自責的になり失敗感を味わざるを得ない。それは一見やさしそうで実は解決不能の問題を与えられる、デンボアの怒りの実験の被験者に似た状況である。あえて理性的観察者にとどまって心に浮かんだことの報告を続けるならば次のようにも事態は進

みうる。すなわち、「私の心にはあなたに対する非常なふんがいの念が浮んでいる」と大変冷静に理性的に自分を観察して言う、というような事態である。これがフロイドには考えられたかもしれないが、そのような感情と冷静な観察の同時的生起は不可能であるから、理性的観察者にとどまることが確保されるかぎりおよそ感情は起らなくなってしまう。また、「私はあなたの治療を受けたくない」という気持は、同盟の破壊でもあるし、批判的抗議であるから、忠実な患者たるものにあり得ぬが、あっても抑圧せねばならぬことになる。

しかしもちろん、このような感情は事実起るし、起ることが治療上必要でもある。抵抗や転移と呼ばれている事実がこれであり、抵抗や転移こそが治療をすすめていく原動力である。問題は、それをフロイドが不合理なもの、治療者に対して患者のもつあるまじき感情、理性的観察者としてのあり方からの脱落としてそれを意味づけたということである。すなわち、フロイドが自由連想を患者に命じたとき、医師に忠実な、協力を惜しまぬ患者の役割という合理主義的人間疎外の概念を患者におしつけることとなった。そしてその概念に合わぬ患者の行動を抵抗、転移、退行、反復強迫として考え分析のまないたにのせることにした。この合理、不合理という二分法がはなはだ無理な二分法なのである。それは学生の諸性質をよく勉強し教師のいいつけをまもるかそうでないかで二分してみようというそういう基準が、学生のリアルな像、のぞましい像をとらえそこねてしまう浅薄な観点であるのと同じである。

フロイドがストイックな理性主義者であって、道徳的芸術的センスに乏しい人間であったと思われる証拠がいくつかあるが、そのことが上にのべた理論の立て方に関係しているであろう。

理性主義が一つの生き方として主張されることに別に異は立てないけれども、心理療法の後の発展、特に感情閉鎖をとくという問題と矛盾してくることだけはここにのべておこう。そしてまたこのようなフロイドには、感情転移の問題も、acting out の問題も非理性的な、したがってフロイドの考

えていえば幼児的なアンリアルなできごととしか映らなかったのはもっともである。

さて、自由連想における理性的観察者の問題から、フロイドの理性主義にまで辿りついたのであったが、それを主体性のあり方からみれば、自由連想が統一体としての人間からストイックな理性を引きはなし、理性のありばに主体を据えようという意図をフロイドは置いているといえるだろう。したがってフロイドの精神分析療法がその目標通りに成功したとすれば、そこには基本的にストイックで理性的な人間ができ上るはずであり、M・ボスがいうようにそれは人間に根底的な救いと安心をもたらすものではなく、自分を理性によってコントロールすることを人間に教え訓練するものでしかないのである。

それはそれとして、フロイドの自由連想は、人間の心をきれいさっぱりと2つにわけ二分法、理性的観察者と、放縦にして盲目的なエスとの二分法に、よって立っているのであるが、実際には主体が見るものとなったとき、主体は自分自身の心に浮かぶものを見られるものとしてそこに定立する。つまり、主体がそこに何を見つめようとするかに影響されて、そこにあらわれるものが決らざるを得ない。見るものと見られるもの、受けとられるものと受けとるものとはそのような対応をもっている。たとえば、自分の心に何がうかんでくるかを探そうとすると何も浮かんでこなくなってしまうと患者はよくいう。内省心理学で問題になったように、内省の心構えは、内省すべき内容を消してしまう。先にのべたように、人は冷静に自分の悲しみや喜びを観察するわけにはいかない。なぜならその人が冷静ならば悲しんでいるのでも喜んでいるのでもないからである。ここでいっているのはいわば相互関係、与えられた体験事実と体験する主体の相互関係を言っているのです、それらが独立でないということである。心の体験事実、それから離れて観察しようとし切ったときは、観察しようすることにその人全体がなっているときは、消えてしまう。観察ではなくて、自分自身が一如になって考え、思いしているときにもっとも活発に動く。心理療法で

重要なのは、少くもある時期には、自分を観察することを止めて自分自身と一つになることではないだろうか。しかし、これはフロイドのとった道ではない。だからフロイドは、彼の理論とは異った事実、フロイドの用語で言えば、主体的自我がそのエネルギーを、体験（エス）を意識にのぼせることにふりむけつつ、他方残りのエネルギーでそれを観察し報告することに向けさせた、そのような主体的自我のエネルギーの使い方（リビドー備給）を要請したものである。そうだとすれば、その主体的自我のあり方自体が問題で、健康な自我と同盟するというように簡単に片づけられる代物ではなく、後に境界線級や精神病で特に問題になったような自我の防禦的でない、むしろ健康を望み、自己を実現し事実を理解し超越する働きに、始めから気がついてよかったのである。むしろ逆にフロイドは健康な理性的な自我を、自明な同盟者として見逃してしまったのである。

私としては、フロイドと異った道、すなわち患者が一如になる道を選びたいと思う。一如というあいまいな表現をもう少しはっきりさせると、患者が、考えることを本気で考え、見るものを本気でみることである。治療者が患者と密接な関係をとって動けるための必要として、患者に表現してもらふことはやむを得ないし、この表現によって、患者もいっそう本当に自分自身でありうる。フロイドのいう観察報告と私のいう表現とのちがいは、患者のことで説明してみれば、「今私にはこれは3かもしれないし8かもしれないという考えが浮んでいます」というのは観察報告であるし、「困ったなあ、3か8かわからないなあ」というのは表現である。前者では主体が一步身を引きはなして自分を疎外しているし、後者では困りのなかから声もれでてくるので、主体はまさに困ってそこにいるのである。なぜ私が表現の方がよい、一如であった方がよいというかの根本はリアリティの問題にある。しかしここで次の問題、すなわち、フロイドがこのような観察報告的な自由連想を考えだした経緯を再吟味するという次の段階へ移ろうと思う。

フロイドの初期の経験の考え、自由連想の創設まで

フロイドの初期の経験と思考の進みを、フロイドの最初の精神分析的著作である「ヒステリー研究」および自伝的著作「自らを語る」等を参照しながら吟味してみよう。

フロイドは、ブロイエルの催眠カタルシス療法から出発した。最初の事例であるエミー、フォン、N夫人の治療経過では、たとえば、N夫人に食事をいやがりたべすぎると下痢をする、という症状があると、フロイドは催眠をかけてなぜ食べられないのかと聞く。N夫人は、結核の兄がたん壺を食卓におき食べ物ごしにたんを吐いた、それがいやだったけれども我慢をしてくだまっていた、小さい頃母親に叱られて冷たくなって脂肪がコチコチに固まっている肉をいやいや食べねばならなかった、そういう経験を話し、それからは食物へのケンオがすっかり消えて沢山たべられるようになる。こうやってフロイドはN夫人の症状をひとつひとつつぶしていくのである。フロイドは、このような事例から出発点となる事実を掴んだと信ずる。それは(1)「ヒステリーの症状は患者にとって外傷的作用をもった、ある種の体験によって決定されるのであって、症状は体験の回想象徴として患者の心的生活のなかに再現される」のであり、(2)「その体験の回想を十分な明白さでよみがえらせ、随伴する感動を再現し、患者がことの経過をできるだけ精細に描写してその感動に言葉を与えるようになるならば、個々のヒステリー症状はたちどころに消えてふたたび起ることがない」というものである。

フロイドが催眠法によって、（後には催眠をかけずに眼をとじさせることによって、最後には自由連想法によって）症状と関連する事実を想起させたということ、およびそのとき症状が消失したという報告を信用しよう。しかしだからといって、上にのべた、(1)と(2)のような理論化ができるだろうか。私としては、いくつかの他の可能な理論化もあるように思える。後にはフロイド自身が彼の理論に2つの修正を施していることも、別の理論化の可能性を勇気づけるものである。2つの修正というのは、患者が想起した体験のうち、幼児期におとなによって性的誘惑、外傷を受けた、

というのは事実でなく患者の（幼児期の）空想である、ということ、および、十分と思われる体験の想起があっても、治療者との関係がまずくになると、症状が再発する、ということである。前者では、それがすでに幼児期になされた空想であるのか、もしくはその後になされた空想であるか、たとえば、フロイドによる治療の当の時間に即興的に作られた空想であるかも、実際には問題である。

要するに、先のフロイドの理論において絶対確かなものとして残るのは何であろうか。

私は、1つの可能な解釈として、フロイドの方法が、実は結局より強力な暗示ではないのか、という考えを提出したい。ヒステリーの症状は暗示によって作られまた消去されるものである。フロイド自身もこのシャルコーの教えから出発した。しかし、フロイドのいうように、そのような簡単な暗示は、1回で奏効するものでもなければ、治療者も患者もともに信じ切れぬものでもある。患者も催眠からさめれば、再び症状の厳然たる存在を認めねばならぬ。治療者も自ら催眠暗示を施しながらも、事実信ずるところを述べているのでなく、説得し命令しているにすぎないことを知っている。このような信じられぬ暗示に代って、より徹底的な患者も治療者も共に信じられるところの「症状の原因はこれだ、もう判った。解放された」という体験をフロイドの方法を通して、患者とフロイドは得たのであると考えられないだろうか。そう考えると、上の(2)において、「随伴する感動の再現」と呼ばれているのは、過去の感動の再現ではなくて、現在の、暗示を強める感動であると解される。

ここで実は暗示とは何か、暗示の効果はどこから生まれるかを再検討せねばならないのだが、暗示の主要な性質として、暗示は暗示をかけられた者の個人的真実となる。という点に注意しよう。はっきり概念的自覚的ではないにしても、暗示をかけられた人は暗示された通りの認知、判断をもつ。暗示されたような意味づけ、構想をその人が行うようになる。暗示が有効だということは、始めから、客観的真実でなくて、個人的思い込み

が力を揮うということである。ここに私が先にのべた構想やリアリティの問題が入ってくる。

暗示の強力さは、暗示された通りの思い込みの強さによるのであるが、その人の全体的な認知や判断のしかたとピッタリした思いほどしっかりと思い込まれるであろうことに疑いはない。逆にその人自身の認知や判断と分離し異質的である程度に応じて暗示は一時的であり力が弱い。

フロイドの方法は、今迄の暗示のように、そしてまたこの性質が暗示という名を示す性質なのだが、他人から、その人の全心理体系と異質的に、注ぎこまれた判断や認知なのではなく、長い時間かけて、患者自身が提供した材料に沿って患者が作り出す（構想する）信念を育てる方法なのである。その意味ではこれを暗示と呼ぶことは不適當かもしれない。しかし、そこに治療者としてフロイドが、患者に方向づけを与え、患者との強い結びつきのなかで同意を与え満足を示す、そのような影響に支えられながら、患者が信念を形成して行き、その影響の下にその信念が保持されるという面を考えれば、やはり暗示といってよい。

このようにフロイドの初期の仕事の成功と失敗を解すると、その後発展して来た精神分析学の全理論体系が全く違ってくることになる。そのうち、1つの問題だけをここにのべておこう。

治癒が、上にのべた意味での、構想によるのだとすれば、いたずらに過去の原因をたずねる必要はなくなる。むしろ要は現在から未来に向う生活の建設的な方向づけが主要な問題になる。すなわち、必要なことは、現在の思い込みや心くばりなどの構想を、もっと患者自身に本来的（リアル）でしかも建設的なものに転換することであり、そういう仕事は、単に治療者の科学的もしくは理性的論理的な仕事なのではなく、もっと人間的な、深く人間を生かすという点で道徳的な、人間をそのすばらしさにおいてとらえるという意味で芸術的な仕事なのである。

フロイドの発見した諸理論が、患者を徹底的に深く理解することに大いに役立つことは確かである。そしてこの患者を理解し患者のリアリティに

沿って患者なりの建設を進めるということが、教育と区別される心理療法の特質であるのであるから、フロイドの仕事は、いわばその前半をなす患者の（心理力動の）理解に巨大な貢献をしたのである。しかしその理解も、生活者である人間の主体性を見逃したところに大きな欠陥をもち、治療目標をもわい小化してしまった。患者の本来性の解放にそった未来への建設の、構成の仕事をどうすすめていくかの研究が、今後の最大の問題となるのではないだろうか。